

6. 2年保育5歳児N児

養護教諭 渡辺 誓代

N児について

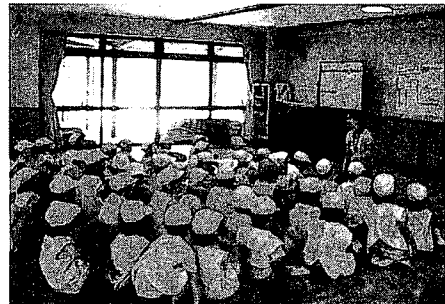
4歳児の時に入園し初めて集団生活に入った。友達のまねをすることが多く、あまりにも近い距離でまねをするので、嫌がられることがあった。知的には低くなく語彙も少なくはないが、友達や教師とのコミュニケーションのとり方に課題がある。相手の気持ちを感じることが得手でないので、近くの友達にちょっかいを出してトラブルになることがある。

友達とのかかわりを通して、自己表現しながらかかわる楽しさやコミュニケーションのとり方を学んで欲しいと願い援助した。

事例1 「やめて」

6月20日（水）

わくわくワールド（5歳児宿泊体験）のグループごとに1列に並んで座り、教師の説明を聞くことになった。



N児 前のP児にくっついていく

P児 ややN児をよけるが、言葉にしない

N児 さらにP児に寄っていく

P児 困った顔をしているが、声を出さない

近くで様子を見ていたが、P児が黙っているので声をかけた

養護教諭「P児ちゃん、嫌なの？」

P児 うなづく

養護教諭「そんな時はいや、やめて、って言いなさい」

P児 黙っている

養護教諭「教えてあげて」

P児 「やめて」

N児 くつつくのをやめる

養護教諭「教えてあげたら、止められるね」

P児 うなづく ほっとした表情

N児 特に表情は変えず

養護教諭「やめて、って言われて、ちゃんと止められたね」

N児 「うん」 うなづいて教師の話聞き始めた

（１） N児の自己表現のあり方

○相手の気持ちがわからない表現

相手の気持ちや状況よりも、自分のしたいことを優先して表現してしまう。相手が反応してくれることが嬉しくて、なかなか止めない。相手が少し避けたり、嫌な顔をしたりしてもわからないようだが、はっきりと意思表示をされるとわかる。

（２） N児の社会的側面の学んだこと

○やめてと言われたらやめた方がよい

周囲の幼児らは初めはあまり言葉にしなかったが、徐々にやめてほしい気持ちを表現するようになった。N児ははっきりと言われると、その行為をやめることができた。P児はあまり自己主張をしない幼児であったので、嫌な時にははっきり表現してN児に教えてあげるようにと促すことで、声を出せたと思う。P児も嫌なことは嫌と言わないと通じないことを学んだであろう。N児は教師に注意されるよりも、友達に思いをぶつけられる方が、聞き入れやすかったようだ。

（３） 今後に向けて

友達とのかかわりにおいて、どのように自分の気持ちを表したり、相手の言葉を受け止めたりすればよいかを具体的に知らせたい。かかわりの成功体験を増やして、自己表現することの心地よさを感じさせたい。そのために専門家の助言を活かし、連携しながら援助していく。

7月にポーターズ協会の専門家に以下のような助言を受けた。

- ・ 4こま漫画に興味があるようなので、それを指導に活かす。「こんな時にはこうすると、こうなります」「こうしたら、こうなったのでよかったね」などハッピーになるような結末にする
- ・ 絵が得意なので、虫の絵などを描いてみんなの前で発表する機会をもつ
- ・ 友達の中にどうやって入ったらいいかと、その場でタイムリーに教えて練習する
- ・ 注意喚起のうまいやり方を教える。たたくのは嫌がられるが、軽く「ねえ、ねえ」なら受け入れられる
- ・ 息を吹きかけられるのは嫌なこと、スカートの中を見られるのは嫌なこと、でもこんなことならやってもいい、というのを教える。周囲の子どもたちから具体的によいこと、悪いことを教えてもらう場を持ってもいい
- ・ 自分は弱いと思っているので、腕力だけが強さでないことを教える。いろいろなバリエーションで（重い物が持てる 我慢する 友達に譲るなど）強いねえと褒める場面をつくる

運動会での組体操の練習を進めていくうちに、役割がわからなくなったりもめたりし始めたため、役割をグループごとに決めることになった。

T教師「グループで誰がどの場所になるか決めて、この紙に名前を書きましょう。
鉛筆と紙を取りに来てください」

N児は誰にことわるわけでもなく、すぐに立ち上がり鉛筆と用紙を取りに行った。
Q児もその後にはち上がったが、R児が止めた。N児は紙と鉛筆を持ってみんなの元に戻り、鉛筆を持って書こうとし始めた。すると、R児がその鉛筆を取り上げようと手を出した。二人は言葉を発しないまま、鉛筆の取り合いになった。様子を見ていたC教師が止めに入った。

C教師 「ちょっと待って、危ないから先生鉛筆預かるね。どうしたの」

R児 「N児君が勝手に取りに行ったし、書くのもするのずるい」天井を向いて言った

C教師 「そうなんだ」

Q児 「N児くん、ずるい」

N児は黙っている。

C教師 「N児くんが紙と鉛筆を取りに行ったし、書くのまでするのはいけないってこと？」

R児 「うん」

V児 「じゃあ、じゃんけんしたら？」

N児 「じゃんけん…」急にじゃんけんをしようとする

養護教諭 「待って」

C教師 「みんな、じゃんけんで書く人決めていいの？」

V児 R児 N児 Q児らはうなづいた

R児・N児 「じゃんけん。ぼい」

R児がやや遅れて出したが、R児が勝った。

R児 「勝った」

N児 「じゃあ、R児くん」

C教師 「R児くんがいいの？」

みんなうなづいた。C教師は鉛筆をゆっくりR児に渡し、他のグループを見に行った。

R児 「じゃあ、3人ピラミッドからね」

N児 「ぼく、ここ」

R児がすぐ書こうとする。

養護教諭「待って。みんなに聞かなくちゃ。みんながいいよっていったらいいんじゃない？みんないい？」

V児 「いいよ」

養護教諭「R児くんもいい？」

R児 「いいよ」

みんないいよと言った。その顔を見てR児はN児の名前を書いた。

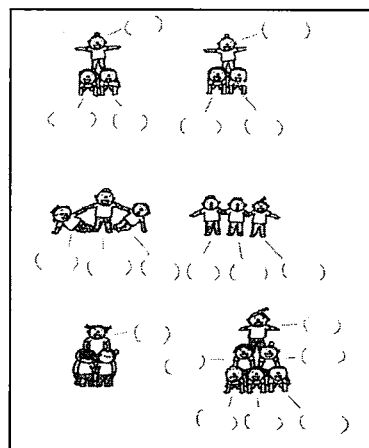
R児 「じゃあ、次はロケットね」

N児 「ぼく、ここでいい？」

R児 「いいよ」

N児はみんなに「いい？」と聞き「いいよ」とR児に言った。

その後みんなに確認しながらテンポよく役割分担を決めて、他のグループより早く、次の活動を始めた。用紙に記入するまでは、組体操をしながらもめることがあったが、役割が明確になり、もめることは減った。



（１）N児の自己表現のあり方

○困った時に言葉が出ない

R児もN児も自分の気持ちを言葉にしないので、ただ取り合いになってしまった。周囲の幼児もすぐに対応できず、鉛筆が危険であったためC教師が仲介することになった。この事例での鉛筆の取り合い場面や、他の生活場面でも自分の思い通りにならず、友達ともめた時に、N児はあまり言葉を出せず手や足を動かして抵抗することが多い。R児のように相手も言葉が少なかったり、「ずるい」などとN児を非難するような言葉だけを言ったりすると、さらに言葉が出なくなってしまう。

○ルールに則った表現

教師が一旦その場を止めて冷静にさせると、なぜ相手がそうしたのか、どうすればいいのか聞くことが出来る。この事例でもC教師が穏やかにもめごとを中断し、話を聞くと、

相手の行動の意味やどうしたらよいかがあった。N児は、相手を憎いとか、絶対譲らないとか思っているわけではないようだ。どうしたらよいかがわかると、何事もなかったかのように切り替えられるN児の姿からして、N児は相手の気持ちを理解するのが苦手なのだと思う。じゃんけんで勝った人が字を書くという理屈がわかると、とても素直に動けた。

また、みんなで相談するという意味もあまり理解されていなかった。これまでの練習で、ある程度役割は決まっていたが、それを確認しなければならなかったのに、「ぼく、ここ」と一番に言って書いてもらおうとした。周囲の幼児もそれを認めてしまいそうだったが、教師は決め方のルールを知らせるために「みんないい？」と念押しした。すると、それをまねてN児もみんなに「いい？」と聞くというルールに則った表現ができた。

（２）N児の社会的側面の学んだこと

○ルールを守ると友達とうまくやれる

この事例から、友達との相談の時には、ルールがあり、その言葉を使って表現するとうまくいくことがわかったのではないだろうか。教師の援助として、トラブルが起きた時にN児の感情に訴えるよりも、ルールや見通しを理解させる方が有効であると思われる。

（３）今後に向けて

話し合いなどの場面では、話し合いのルールを意識させたり、本事例の記入用紙のように、視覚的な教材を活用しながら進めていく。



前日、5歳児のドキドキスーパーランドが開店した。N児は輪投げと的当てのお店を担当し、入口で案内するのがN児とF児の役目だった。お客さんは少なく、N児は店番用の椅子に座っていた。

F児 「N児くん、『いらっしやいませ』行って来て」

N児 「はいは〜い。いらっしやいませ〜」



N児は嬉しそうに、大きな声で言いながら走っていった。

そのうちお客さんを連れて戻ってきた。

F児 「輪投げと的当て、どちらにしますか？」

B児 「輪投げ」

N児 「どうぞ、こちらにお座り下さい」手を差し出して、丁寧に言った。

今度はD児が店の前にやってきた。

N児 「輪投げと的当て、どちらにしますか？」

D児 「的当て」

N児 「どうぞ、こちらにお座り下さい」

D児が座ると、N児は満足そうに店番用の椅子に座った。

事例 3－② 「そこ、N君の場所やよ」

お店が終わり、店ごとに牛乳を飲むことになった。C児とF児が牛乳を運んできた。みんな牛乳を手に取り、座ろうとしていた。N児は店番用の椅子に座った。G児とH児はみんなから離れた壁に寄りかかって、にやにやと笑いながら床に座った。

養護教諭「そこはだめでしょ」

N児はその言葉が聞こえなかったのか、にやにやとしながら、H児とG児のまねをしてその横に座った。

H児・G児「は〜い」

二人は立ち上がって、先ほどまでN児が座っていた椅子の辺りに座った。2人が座り直しても、N児は壁から離れなかったので、いただきますができなかった。するとJ児が怒った顔で立ち上がってN児の前に行き、N児の腕をぐっとつかんだ。N児もJ児も言葉を発せず、2人はにらみ合いのようになった。

養護教諭「J児君、どうしてほしいの？」

J児は黙って腕をつかんでいる。

養護教諭「立ってほしいの？」

J児 「立って！」

言われるとすぐN児は立ち上がり、H児とG児の座っている所へ行き

N児 「そこ、N君の場所やよ」とH児の膝の上に強引に座った。

H児 「じゃあ、いいよ。あっちいくからね」

H児とG児はふくれっ面でN児から離れた椅子に座り直した。N児は無表情でその場に座り、みんなでいただきますをした。

（１） N児の自己表現のあり方

○パターン化され安心できる表現

この日の前日、N児は風邪で欠席しており、朝はすぐに保育室に入れず心配そうだった。しかし、事例３－①からわかるように、お店番の仕事はきまりがあり、その通りに表現すれば、相手が反応してくれた。前日はF児が一人で案内役をしていたので、F児がする通りにまねればよかった。F児が指示をして主導権を持っていたようだったが、N児は嬉しそうに応じていた。決まった言葉や動きがわかると安心して表現できるようだ。

○友達をモデルとする表現

これまでもN児は友達の表現をまねることが多かった。事例３－②からわかるように、N児は、H児とG児の、にやにやした態度を見てそれをただ単にまねたと思われる。

事例①も②も友達の表現を真似るという点では同じである。しかし、②の場合はいけないことをまね、友達を待たせることになり、J児に腕をつかまれる結果となった。N児は、その内容が良いことであれ、いけないことであれ関係なくまねている。

（２） N児の社会的側面の学んだこと

○友達のまねをして、決まった表現をすると、お店の仕事がスムーズにできる

どうしたらよいか心配だったが、友達の様子をまねて決まったセリフを言うと仕事ができた。N児は安心した表情で楽しそうにお店の仕事をしていた。

○友達のまねをして、いけない場合もある

友達のまねをして壁に寄りかかって座ったことで、友達が怒ってしまった。椅子に座ると、みんな納得して牛乳を飲めた。

（３） 今後に向けて

N児は友達の表現をよく見ている。友達に興味を持っているといえるだろう。今後は、その表現が適切かどうか、判断できるようになることが望まれる。

しかし、N児はそれを考えたり場を読むのが苦手なので、友達とともに生活する中で「こうしてほしい」「こうだからよくないよ」とN児の弱さを支える集団を育てていきたい。N児に接する時、うまく表現できず言葉の少ない男児がかかかわるとトラブルになることが多い。逆に、N児の意をくんでくれたり、言葉を補ってくれたりする女児がかかかわると、安心することが多いようだ。そんな女児のかかわりを認めることから始めたい。

さくら組の保育室にいと、N児がこちらに向かって走り寄ってきた。

N児 「I児ちゃんに追いかけられる」手には箱でつくった武器を持っている
養護教諭「ここはお邪魔になるから出ようね」

保育室から出るように促すと、N児はすぐに保健室に入っていったので、後について行くことにした。

養護教諭「どうしたの？」

N児 「I児ちゃんに追いかけられるー」と足をじたばたさせた

養護教諭「追いかけられるのは嫌なの？」

N児 「うん」

養護教諭「じゃあ、I児ちゃんにいやって言ったら？」

N児 「怖くて言えんー」さらに足をばたつかせた

ちょうどその時、I児が保健室にやってきた。I児は2、3歩N児に近づいた。
N児は黙っていた。

養護教諭「ああ、ちょうどよかった。I児ちゃん、N児君話したいことがあるんだって。(N児君) 言ってごらん」N児の後ろから声をかけた

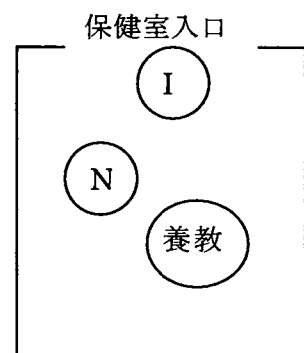
N児 「追いかけるのやめて」I児に少し近づいて言った

I児 「・・・じゃあ、どうしたらいいが？」

N児は黙って立っている。

I児 「たたかいごっこ？」

N児 「うん！」



(1) N児の自己表現のあり方

○きっかけや相手との距離があると表出できる表現

N児は、遊びの雰囲気を読むのが苦手なところがあり、相手が自分よりも強いと感じると、「怖い」とか「どうしたらいいかわからない」という状況になりやすい。相手は遊んでいるつもりで追いかけてきても、それにどう対処したらよいかわからなかったようだ。し

かし、相手が動きを止めて、聞いてくれる態度を示したり、教師が「言ってごらん」ときっかけをくれたりすれば、落ち着いて「追いかけるのやめて」と自分の思いを言葉で表現することができた。

（２） N児の社会的側面の学んだこと

○相手が動き回っていると、うまく伝えられないが、立ち止まって聞いてくれるとうまく話せる

I児はN児にとって、強くて遊びたいけれど、本気で追いかけられると怖い相手である。この日、どういういきさつで追いかけていたかはわからないが、I児が思っているよりも、N児は威圧感を感じていたと思う。走ってくるI児には「やめて」とは言えず、ただ逃げ回っていたようだ。しかし、I児が立ち止まって距離を置き、聞いてくれる態度を示したことで、こんな状況なら話せるし、話すと自分の思ったような遊びに変わることを学んだと思われる。

○思っていることを言葉で言うと理解してくれる

N児は、言葉で「やめて」「追いかけないで」とは言わずに、武器を片手に逃げ回っていたただけだったので、相手に思いは通じていなかった。しかし、言葉にすると、すんなりと相手は受け入れてくれ、追いかけられなくなった。言葉で言うことの効果を感じたと思う。

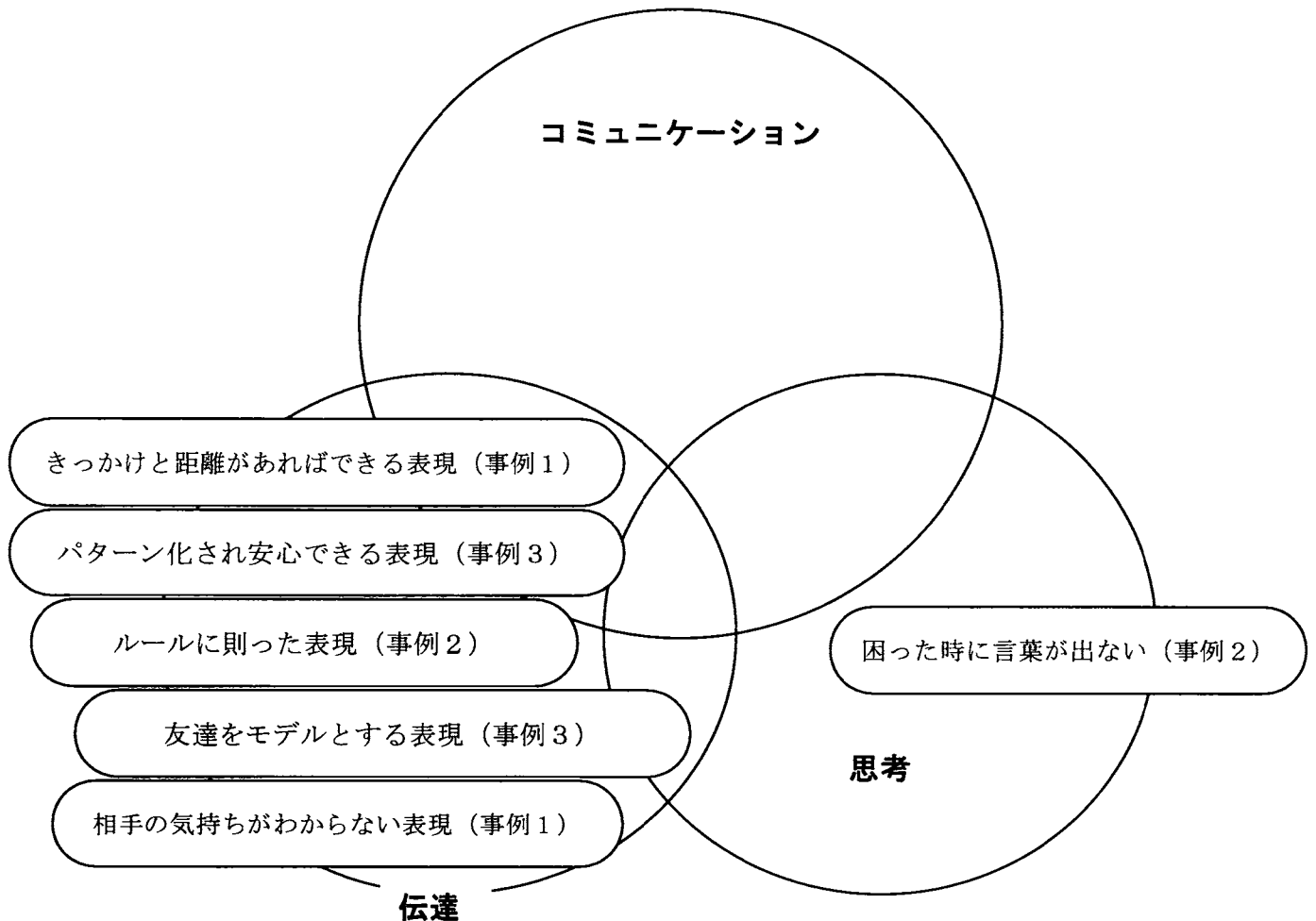
（３） 今後に向けて

N児には、友達と遊びたい気持ちが大いにある。遊びながら時には教師に助けを求めたり、落ち着けば友達と交渉したりもできる。場に応じた態度で接すると友達とトラブルにならないという経験を積み、友達と遊ぶ楽しさを味わえるようにしたい。

～ 1年を振り返って ～

事例を検証する中で、一人一人の自己表現のあり方が、「伝達」「コミュニケーション」「思考」の3つに分けられるのではないかと考えた。N児の自己表現のあり方から見えてきたキーワードをその3つに分類して位置づけ、その図及び各事例より見えてきたことを考察する。

<N児の自己表現の様相>



〇考 察

<コミュニケーションの課題>

N児は、コミュニケーションに課題があると感じていた抽出児であり、1年を振り返ってみるとやはりコミュニケーションのための表現が少ないことがわかる。事例を追ってみると、困った時に言語による表現ができず、思考はしていても相手には伝わっておらずトラブルになっていたこともわかった。

N児は、ルールやモデルを通して表現方法を獲得し、コミュニケーションよりも、伝達を目的として表現することが多かった。

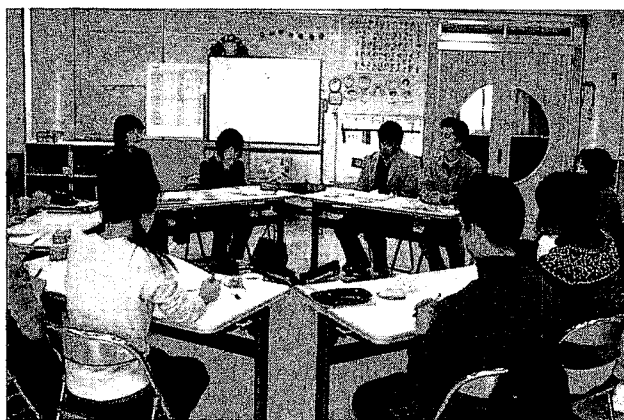
4歳児の頃より、自分の思いが優先し、相手の気持ちを察するのが苦手なN児は、5歳児の1学期も、言語を用いないで友達に関わっていくので事例1のようなトラブルになることがあった。しかし、どのようなやりとりをすれば、相談が進むかがわかると、2学期には事例2のように話し合いもできるようになった。

困った時にうまく言葉にできない点は、N児の特色として経過を追っても見られた。それでも時には事例4のように教師の介入や、友達の聞く姿勢があると、自分の気持ちを言葉にすることができるようになった。言葉で伝えることのよさに少しずつ気づきながら育ってきたと思う。

＜コミュニケーションのツールの取り入れ＞

これまで友達のまねをして、嫌がられたり、悪乗りしすぎて注意されたりすることがあった。反面N児は友達の様子をよく見聞きしているとも言える。事例3では、同じお店をしていた女児の表現をまねて、安心して場を楽しむことができた。

友達とのかかわりを求めているが、表現の仕方がうまくないN児は今後もコミュニケーションの課題を抱えて成長していくことだろう。教師は、表現の仕方や相手の気持ちをN児に伝えて、成功体験を増やす援助を心がけることが重要である。N児の事例を追うことで、このような幼児にとって、表現のモデルややりとりのルールがコミュニケーションのツールとなり、トラブルを回避でき友達とかかわれることが再認識された。



特別支援学校とのケース会